

書名：恋愛なんかやめておけ

著者：松田道雄

出版社：筑摩書房

出版年月：1970年5月

総ページ数：231ページ



推薦者

木内陽一

鳴門教育大学大学院教授
人間形成コース

恋愛論の古典ではあるが、出色の近代日本思想史の叙述ともとれる。いや、現代の視点から見れば、恋愛という「窓」から見た、近代日本人の生きざまの検証と言った方が適切かもしれない。恋愛しなければ人生は無意味か？本学の学生諸君も北村透谷ばりの「恋愛至上主義」をとるだろうか？恋愛は難しい問題なのだ。本書の登場人物が実に多彩である。こんな人が恋愛についてこんなことを言っているのか、と明治・大正期の大思想家でさえ身近に感じてしまう。もちろん推薦者の愛好する森林太郎軍医総監も登場する。びっくり仰天するのは淡路島出身の作家、岩野泡鳴の「神秘的半獣主義」だ。あまりに過激な事を正直に書くので、何度も発売禁止されたという。つまるところ泡鳴は善悪を認めず、人間の全生命のいとなみである恋愛によって、いまの瞬間を最高に生きればよいというのだ。この男本位の刹那主義に反抗したのが、平塚らいてう、伊藤野枝らの「青鞥社」グループだった。恋愛をめぐる近代日本の男女のあらそいを歴史的にたどった著者は、恋愛と結婚は別だと主張する。なんだ、そんなことはあたりまえ、と若い人は言うかもしれない。しかしこの地点に到達するまでに、長く苦しい道のりが日本の近代思想にとって必要だった事を本書は示している。出発点は恋愛でも、お見合いでも、偶然でもかまわない。大切なのは、男女が助けあってそれぞれ個性をそだてる場所をつくりあげるということだ。なぜなら、「人生のたのしきは創造のたのしさだ。自分しかもってないものが、この世の中に姿をあらわしていくのを見るたのしさだ。」(223頁)これが本書の基調を成している考え方だ。本書は若者に向けられた、ひとつの人生案内でもある。

著者を古風な性道徳を押しつける、頭の固い人と捉えてももちろんかまわない。四十年前の本だから時代的な制約もあるだろう。だが、人間の本性はそう簡単には変わるものではない。本書の主張を検討しつつ、学生諸君におかれては、この高島の地において、推薦者をうならせるような生き方をぜひ見せてほしい。

著者の松田道雄(1908-1998)は市井の一小児科医として一生をおくった人。活発な評論活動に加えて、ロシア革命史の歴史研究をおこなった。小児科医としての著作『育児の百科』(全三冊、岩波文庫)も同時に薦めたい。松田氏の思想家としての幅広い視野、温かいまなざしをここでも見ることが出来る。

